

子どもとテレビ (その2)

1. 教師による視聴コントロールの効果

深谷和子(東京学芸大学)

① テーマの設定

昨年度の本学会におけるわれわれの発表(子どもとテレビその1)で明らかにされたことの1つは、子どもたちがテレビとどう関わり、どう距離を保つかは、子どもの自己像の形成にもつながる重要なテーマであること。すなわち望ましいテレビ視聴態度の確立は、子どもの社会化のプロセスの重要な側面であり、その意味でこのテーマは、子どものしつけ教育の中で、早急にそのあり方を問わなければならないこと、であった。

昨年に引き続き行われたアンケート調査に加えて、今年は一歩で、視聴コントロールをめぐって、アクションリサーチ的研究にも着手した。まだサンプル数は少ないが、ここにその一部を報告したい。

② 条件の設定

教師による視聴コントロールの手法を、3つの条件によって設定し、その効果を比較した。

〈グループ1〉 視聴の記録をつけてグループ
「つい慣性で長時間見てしまう」のが一般の子どもたちのテレビ視聴態度であるようだが、毎日その日に見たテレビ番組を用意された用紙に記録させることで、自分のテレビ視聴をふりかえらせてみる。記録をつけながら、自然に反省や後悔といったメカニズムが働き、次第に短く主体的な視聴態度が形成されるのではないだろうか。期間は2週間。

〈グループ2〉 テレビを悪役にグループ

「テレビを見ることば、どんなに自分たちの生活に悪影響を及ぼすか」すなわち教師が用意したプログラムによって、くり返し子どもたちに、警告を与えるような働きかけがされる。「朝の時間」「授業中」「帰りの時間」のうち、毎日2場面を用いて、テレビの悪影響をほのめかす。

例)「今朝はみんな元気がないですね。ゆうべTVを見すぎたのではないですか。TVを見ないとからだは感じなくても自然に疲れがたまると神経の疲労が

るのです。夢中になって見るから次の日まで神経の疲れが残るのです。みなさんはどうでしょうか」(オ1回)
「ノートがゆがんできたくないですね。TVは目と疲れさせるだけでなく、長時間筋肉と動かしすぎに見ていることで、指先の動きもスムーズでなくなるのかもしれないですね。ノートを見てごらん下さい。どうでしょうか」(オ4回)

「TV病の話がずっとして来ましたが、先生はあじわっているのではありません。忘れ物の多い人、ケガが多い人など、注意のない人の本当の原因はTVなのですよ。まずTVを見ないでかんけいさ。という心がまえが、みんなの目も金も金とさせ、健康にさせるのです」(オ19回)

このようなインストラクションを20回用意して2週間の間に与える。

〈グループ3〉 テレビを善玉にグループ

自分の見たい番組をしっかりと心置きなく見るために、生活を立て直させる。仕事、遊び、勉強などを見直させる。テレビを見るための時間のつくり方を工夫させる。(オ1週)

次に「お気に入りの番組を見つけて積極的に視聴させる」その感想を書かせ、話し合いをさせる。

「みんなの感想もとてもしっかりしていますね。他の用事を終らせてしっかりと見るのはとてもいいことですね。テレビは良くないという人もいますが、そんなことはありません。自分の見たい番組を決めて見ればとてもいいことなのです」(オ2週)

③ 方法

まずアリテスト(子どものテレビ視聴態度とテレビ観についてのアンケート調査・テレビ視聴時間記録用紙)を行い、1週間後に3条件を設定した実験指導に入る。2週間で終了。その後約20日後に、アリテストと同じ2種類の用紙を用いて、ポストテストを行う。対象は小学校4年生。

④ 結果

当日配布